目指すは日本一のナンバー2

KEYWORD

[キャリア・カフェ]

「就職活動はまだ先だし、目標も明確でないのでキャリア支援センターにはちょっと入りづらい」という学生のためのオープンスペース。自分の将来について考えるヒントをくれる書籍やDVDが置いてあるほか、毎週月・火・金（10:30〜17:30）ミントスによってカフェも運営されている。

Kagawa University Career Cafe
Presented by
MINtS!

就職活動は3年になってから始めるという人がほとんどで、1、2年の時には、就職に結びつくことに興味がないというのが大学生の傾向です。この1、2年の時に、少しでも「就職」ということに関わってもらおうというコンセプトで始まった取り組みが「キャリア・カフェ」です。おもしろいのは、学校側主導ではなく、運営が学生に委ねられていること。まだスタートして丸1年ですが、今までになかった波をおこしています。

キャリア・カフェは、MINtS（ミントス）という全9名のグループが運営していて、その代表が近成麻子さん（教育学部3年）。「ゼロからはじまった取り組みなので、何をやるか具体的に決まっていないのは大変ですが、とてもやりがいがありますね」という近成さんは、「1、2年生対象なので、就職を助けるのではなく、その入り口を広げる活動をやりたい」と考えています。現場でバリバリ働いている銀行員、NPOの代表、お寺の住職という3人の講演を実現しましたし、就職に関連したDVDや本を置いてあるキャリア・カフェのオープンスペースで本物のカフェ・サービスもはじめました。「いろいろな考え方の人に話を聞くのは大切だと思うんです。それで自分が何に興味を持っているのか、わかることがあるじゃないですか。だから、違う生き方の3人の講演にこだわりました。カフェをはじめたのは、新しいことに出会う場にしたかったからです。キャリア・カフェには学生だけでなく、キャリア支援センターの職員の方もいらっしゃいます。普段は接点のない人同士が結びつくかもしれませんし、ここで偶然出会う本やDVDがあるかもしれません」と言う近成さん。「キャリア・カフェという取り組みには、運営に携わる学生の成長という狙いもあるそうです。だからいろいろな企画をやりやすい面があります。今度は新入生を対象に、先生や授業についてのアンケートを実施したいと考えています。ベストジーニストの先生とか発表したいですね」と張り切っています。

ところで、ミントスは新入生サポート部門、カフェ部門、学生生活サポート部門に分けて、それぞれ責任者を立てて組織されています。今は人数が少ないため、部門をかけもつケースもありますが「今後メンバーが増えてもスムーズに活動できるように」という近成さんの配慮です。そんな自分を「本当は代表というよりもナンバー2タイプ」と自己分析。でも、将来の夢は「日本一のナンバー2になること！」だそうです。

近成 麻子

PROFILE

ちかなり　あさこ
教育学部3年生

Career Cafe

DESIGN YOUR FUTURE.

教育学部生が考えました行きたくなるイベントとは？

今年5月、アルファあなぶきホールで開催された「きょうから音読・読み聞かせ名人！」。当日300人を集めたこのイベントは、香川大学の学生が企画・運営したものです。学園祭的なものと違う、本格的なイベントの成功。その裏には、「実践型インターンシップ」に積極的に取り組んだ秦早織さん（教育学部4年）たちの試行錯誤がありました。

香川大学では授業の一環として、学生のうちに職場体験をするインターンシップ制度を導入しています。この制度にさらに一歩踏み込み、学生の知識や感性を活かし、企業側と一緒に具体的な課題解決を目指すのが「実践型インターンシップ」です。秦さんはこの制度に挑戦。その受け入れ企業が「アルファあなぶきホール」でした。

アルファあなぶきホールから秦さんに出された課題は『若者を中心とした集客の方法を探る』こと。そのため、自分たちでイベントを企画・実施し、問題点を見つけることにしました。

「教育学部だから教育と関連したイベントを企画したい」と考えた秦さんは、関心の高まっていた音読・読み聞かせのイベントを企画します。「読み聞かせは、小さな子どもが対象だから、必ずその親たちも会場に来てくれるはず」というこの企画は、ホール側からも賛同を得られました。しかしここからが苦労の連続だったのです。

イベントは「私を含め同じゼミの学生6人が中心に動きましたが、ほかの香大生40人に協力をお願いしました」というほど大きな規模。ゲストへの出演依頼、経費の管理、広報の手配、冊子の制作、チラシ・ポスター・ホームページの制作などなど、仕事は次から次に出てきます。そんな中、「実は、実施1カ月前になって1回つぶれてしまったんですよ」という秦さん。「どれもこれも、全部自分でやろうとして限界がきてしまいました。でも、その時にほかのスタッフから『もっと私たちに仕事をふってほしい』と言われたんです。今のままではお手伝いで、一緒に参加してる気がしないと…。うれしかったですね。その時、自分の仕事はマネージメントなんだということもわかりました」。スタッフに仕事を分担するようにしたら、たくさんの意見も出てくるようになり、より内容も充実してきました。当日は、たくさんの人を集め、一般向けのイベントをゼロから企画し、実施するという貴重な経験を成功で終わらせました。

「今回のことで、私は人のつながりの大切さやパワーを学びました。これは社会人になっても絶対生かせる経験です」と語る秦さん。「実践型インターンシップは本気で取り組むと大変だけど、やるならとことんまでやるべきです。すごい宝物になりますよ」と、後輩に力強いエールを送ってくれました。

KEYWORD

［実践型インターンシップ］

企業で実際に問題となっている課題に対して、参加する学生が大学で学んだ知識を活用し、担当教員のサポートを得ながら企業と一緒になって問題解決を行うインターンシップ。従来の制度以上に実社会で実績を積むことができる。

秦 早織

PROFILE

はた　さおり
教育学部4年生
（右頁写真右端）

【イベントまで―6カ月ドキュメント】

11月に初めての打合せ。社会人の方と接するのは初めて。メール、電話のマナーから学びました。

音響、照明、司会…自分たちでできる手段を探し、打合せを重ねました。

当日の会場のようす。約300名のお客様が入ってくださって感激！

学問を超える学問

ビジネススクールは、戦う社会人の鍛錬場

PROFILE

おおはし　ゆうこ
株式会社タダノ
企画管理部
社長・副社長 秘書
兼 採用担当

大橋 祐子

学生が帰った夜のキャンパスに車が続々と入り、昼とは違う活気に満ちはじめました。これは仕事を終えたビジネスマンたちの通学風景。そこにタダノで秘書として、さらに採用担当として活躍している大橋さんの姿もありました。

大橋さんが多忙な中で入学を決断したのは、入社10年目という区切りを迎え『夢中で走ってきた』これまでを振り返ったのがきっかけ。「仕事の処理能力は上がったけれど、自分は成長しているのだろうか？と自問したのです。実務のスキルアップを超える”何か“を求める気持ちになっていた頃からビジネススクールの存在が気になり始めました」。

ビジネススクールはMBA（経営学修士）取得のために企業や行政から派遣されている人や、大橋さんのように自主的に入学した人など社会人が中心ですが、大学院進学の道を選んだ23、24歳の学生や留学生もいて、多彩な顔ぶれ。その全員に共通しているのは、学ぶことへの強い情熱です。

「鮮烈だったのは、『あなたの支払った授業料を取得単位数で割りなさい』という教授の言葉。『あなた方は1コマ数万円を支払ってここに居る、その価値を意識すべきだし、我々はその対価を意識して講義します』と言われたことが、ずっと頭に残っています。学生時代はそんなこと考えもしなかった。学ぶことの価値と、それほどの思いで教授は指導をするのだという迫力を感じました」。

現場経験を持つ社会人学生が多いだけに、ビジネス上でのケーススタディやグループワークでの盛り上がりは格別。『それは机上の論理じゃないか…』『実社会では…』といった、経験をベースにした意見がぶつかり合い、議論や笑いが生まれます。

「経験や年齢を越え、何の制約も気兼ねもなく、みんなが経営者の視点で発言することが求められる。こんな恵まれた環境、そうはありません。『違う環境やポジションの人間が語り合ってこそ視野が広がる』という教授の助言を実感しています」。

会社が終わると大学へ向かい、帰宅は夜中という生活は、レポートと睡眠不足との闘いです。「でも深夜メールにも直ぐに返信が来ると『あぁ、みんなもやってる！』と頑張れるんです」。

仕事と大学の両立という厳しい毎日を共にする仲間の存在が、社会人学生を支えています。現在大橋さんは修士論文のテーマを模索中だそう。「役立つものを持って帰りたいという思いがあります。小さなことしか出来ないかもしれないけれど、ビジネススクールに通った価値のある正しいベクトルで、大好きなタダノにプラスになることをしていきたいんです」。

来年大橋さんはビジネススクールを卒業します。しかし学ぶことはここで終わるわけではありません。社会人の勉強は、より自分を高め、社会とつながるために自ら追い求めていくもの。そこにゴールはないのですから！

KEYWORD

香川大学 ビジネススクール

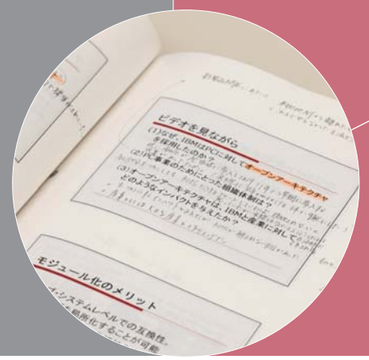
平成16年4月に、香川大学大学院地域マネジメント研究科内に開設されたスクール。中四国地域初のビジネススクールとして2年間で企業や行政、NPOなど地域で中核をになうリーダーを養成することを目的にしており、理論と実務の両面を重視した講義が行われている。20～50歳以上の社会人まで、院生の層は幅広い。

社員証

株式会社タダノの社員証。これを外す時が、会社員から学生へとスイッチが変わる時。

ビジネス書

研究テーマに関連した専門書。通学時はもちろん、通勤時もいつもバッグの中に入っています。



ファイルノート

講義のテキストにはたくさん書きこみが。書きながら思考を深めていきます。